

國學院大學學術情報リポジトリ

自由帝国都市ローテンブルクの成立

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 矢島, 昴, Yajima, Takashi メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000008

自由帝国都市ローテンブルクの成立

矢島 昂

まえがき

南ドイツ、バイエルン州の北端、フランケン地方に位置するローテンブルク・オブ・デア・タウバーは、中世の面影をそのままに残す街として知られ、近年では世界中から観光客を集めている。筆者はたまたまドイツ留学中に一ヶ月ほどこの街に滞在したことにより、この街の歴史と文化に興味を持つようになった。近年外国語文化学科の専門科目である「都市文化論」を担当する必要が生じた際に、中世の人々の生活を通じて、都

市の持つ文化的な意味合いを明らかにしたいと考えたのだが、一セメスターⅡ半年間の授業では、背景となる中世都市の成り立ちや街自体の構造、人々の生活の実態などの説明に時間をとられ、「都市の空気は自由にする *Stadluft macht frei*」と言われた中世都市の、記号としての意味を詳述したくとも、十分な時間を割けないのが実情だった。

ローテンブルクの成立やその後の発展、またいわゆる自由帝国都市の実情などについて、必要な知識を要領よくまとめたものがあれば、受講者諸君にあらかじめそれを読んでおいて貰うことでこの部分を省略し、都市の記号としての意味の検討から

授業を始められる。

旅行目的地としてのローテンブルクを紹介するものはいろいろあり、なかでも新潮文庫版の『ドイツものしり紀行』のローテンブルクに関する部分は、この本自体の入手が容易であるのに加えて、ドイツ語部分のカタカナ表記におおむね誤りがないなど、旅行案内としては十分推奨に値するのだが、自由帝国都市そのものについてはほとんど記述がなく、しかもホーエンシュタウフェン家の国王コンラート三世の子フリードリヒをフリードリヒ・バルバロッサと混同するような誤りを犯していて、大学での授業の資料とするにはいささか心配なところがある。また、中世都市そのものについての文献は、日本人によるもの、ドイツ語からの翻訳のどちらも多数が出版されているが、ローテンブルクに特化して記述するものは存在せず、それらを参考文献として紹介しても、全てをあらかじめ読破して貰うようなことは、忙しい学生諸君にはとても期待できない。結局、当然のことながら、筆者自身が必要な部分をあちこちから抜き出して参考資料をまとめるのが、一番の早道と言うことになるのだ。

こうして様々の文献を集め、いざそれらのまとめに取りかかろうとした所、カリキュラムの改訂があり、都市文化論は廃止されてこうした参考書の必要もなくなってしまった。授業の前

提として使われるのではないとすれば、その性格も多少異なってくることになるが、せっかく集めた資料をそのまましておくのも幾分残念のように思われるので、取り敢えず一つの文章にまとめておきたいと考える次第だ。

筆者はしかし正規の歴史教育を受けたわけでもなく、ドイツ語が読めるとは言うものの、博物館などに公開されている以外の資料を直接参照出来るわけでもない。結局はドイツ語の資料による検討を加味した旅行案内のようなものとなる可能性が高いと思われることを、あらかじめお断りしておきたい。

発端

発行年の記入がないのでその点がいささか困るが、筆者が一九八七年に入手した『ローテンブルク都市史』¹⁾は、その記述を名前の検討から始めている。この *Rotenburg* という都市名は、古い綴りのため余分に *r* が入っているが、*rot* は「赤い」と *Burg* 「砦」の合成語であることはドイツ語の初心者にもすぐ分かる筈で、「赤い砦」を意味する。正式な名称が「オプ・デア・タウバー」、「タウバー川の上の」となっているのは、同じ名前の街が存在するため区別する必要があることを示しており、地

名であれば日本でいう小字のようなものでなくても記載されているフォルクスヴァーゲン社の道路地図²⁾の索引によれば、同じ綴りの *Rothenburg* は我々がここで問題にしている街を含めてドイツに四つ、スイスとオーストリアにそれぞれ一つ宛、さらにまったく同じ発音になる *Rotenburg* がドイツに二カ所あって、この名前がさほど特別なものでないことが分かる。問題はなぜ『赤い砦』なのかということだ。

『ローテンブルク都市史』の著者はまず、この名称が色彩を示す赤ではなく、*>Rodung>* 「開墾」から来ているという説を紹介する。「開墾をするための拠点として作られた砦」*>Rodenburg>* が転訛したという考え方で、いかにもありそうにも思える。この説は、現在残されている市門の一つに *>Rode>* の形容詞形を用いた *>Röderbar>* があることによって補強されるだろう。市門の名称は通常その門を通して街を出て行く道がどこへ行くためのものかによって付けられるので、この門が開墾地への出口であるとするれば、砦全体がこの新たに開墾される土地を守るためのものと考えることが出来る。この説にしかしさほどの説得力を感じられないのは、この開墾地がどこにあったかが不明だという点にあるだろう。

『都市史』の著者が挙げるより常識的な説明は、伝説の中で「酢

入れの瓶」*>Essigkrug>* と呼ばれる、タウバー川のヘアピン状の屈曲により谷へ大きく張り出した平らな尾根に作られた砦の屋根瓦の朱色が、砦全体を赤く見せるからとしている。たしかに夕刻にタウバー川の畔や対岸から眺めれば、街全体が赤く染まって見えるのは間違いない。しかしこの名前が付けられた十世紀頃にもやはりそうだったのだろうか。また夕日に赤く輝く砦がローテンブルクという名前になるのであれば、もつと多くのローテンブルクが存在しても良いのではないだろうか。

右の二つの説を、不十分なものとして自ら退けた後、『都市史』の著者は、この *>rot>* はやはり色彩を表すものではあるが、現実の色ではなく、人間の思考の中で法と強く結びついているという考えを提示する。ローテンブルクの名は、この砦が、法が執行される場所、裁きが行われる砦として人々の目に映り、それが法＝赤という連想から定まったという説なのだ。確かに現在でもドイツの最高裁判所判事の法服は赤であり、中世の死刑執行人は赤い服を纏って登場することが多い、後者の場合、この赤と血の色との関わりがしばしば言及されるが、これはむしろ法の執行者を表すものと考えるのがより正しいであろう。実際にこうした名称がどのようにして決まって行くのかは確定できない事柄だが、この最後の説は、ヨーロッパ社会に法による

支配が徐々に導入されて行く時代の始まりと重なるだけに、より意味深いものといえることができるであろう。

ローテンブルクの起源について、公式ホームページに載せられている「ローテンブルク小史」³⁾は、次のように述べている。

「一九七〇年頃、東フランケン⁴⁾の貴族ラインガーが、後にローテンブルクとなる街の下側、タウバー川の谷にデトヴァンク教区を開設した。その聖ペテロ・聖パウロ教会は、後のローテンブルクの主教会である聖ヤコブ教会の母教会となる。

一〇八〇年頃、コムブルク伯家の者たちが、今日のシュピタール（施療院）の隣に位置する、いわゆる「酔入れの瓶」に砦を建設した。一一一六年に伯爵家の遺産は、シュヴェービシュ・ハル近郊に彼らが創設したコムブルク修道院とヴェルツブルクのノイミュンスター教区の手に渡った。」

このホームページはしばしば書き換えられているが、二〇〇七年から一一年頃までの同じ欄の記述は、これとはやや異なっ

ていた。

「一九七〇年頃、東フランケン⁴⁾の貴族ラインガーが今日街の一部となっているデトヴァンクに聖ペテロ教会を建設し、ヴェルツブルクの司教から十分の一税区⁵⁾の分離を取り付けた。その際、後にローテンブルクとなった地域の小集落についての言及がなされている。

一〇七〇年頃、ゲープザッテルの村などを所有していたシュヴェービシュ・ハルの近郊コムブルクの伯爵たちが、今日「酔入れの瓶」と呼ばれているタウバー川に向かって突き出した山の尾根にローテンブルクの砦を建設した。

一一一六年にコムブルク＝ローテンブルク伯爵家は断絶した。伯爵のハインリヒは、ゲープザッテルやローテンブルクを含めた所有物の一切を、彼の一族の寄進によって出来たコムブルクの修道院に遺贈しようとしたが、皇帝ハインリヒ五世は後継者として自分の甥であるホーエンシュタウフェン家のコンラート⁶⁾を指名した。」

これらの記述から明らかになるのは、ラインガーという東フランケン⁴⁾の貴族が、今日のローテンブルクの北二キロメートル

ほどのタウバー川の谷の中にあるデトヴァングに新たに教会を寄進したこと、またローテンブルクの南西六〇キロメートルほどのところにあるシュヴェービシュ・ハルの近傍にあるコムブルクを本拠とする伯爵家の一族が、「酢入れの瓶」に砦を建設したことの二つであるが、本来なければならぬ筈の、ラインガーとコムブルク伯家の関係についての記述が欠けているのだ。このあたりの事情は、これら二つよりも前の記述を見ることによって推測が可能となる。先に挙げた『ローテンブルク都市史』は、次のように述べている。

「九六八年あるいは九七六年に、ラインガー（この名前は後にライヒャルト次いでリーヒャルトと変化する）という名の東フランケン³の豪族がデトヴァングに教区を設立した。これはおそらく九六八年の一月五日のことであつたろう。このリーヒャルトは、デトヴァングとその周辺に広い地所を所有していた。言い伝えによるとこの人物がローテンブルクⅡコムブルク伯爵家の開祖とされている。九九〇年頃、彼はコムブルクを入手したのかも知れない。このデトヴァング教区の創設者であるラインガーが、ローテンブルクの伯爵家の砦の建設者だったということは、かなり蓋

然性の高いことであると思われる。」

また、聖ペテロ・聖パウロ教会に用意されているパンフレットには、この教会の設立の事情について、非常に明瞭に

「九六八年に騎士ラインガー・フォン・コムブルクの寄進した教会がヴェルツブルクの司教ボツポ・フォン・ヘンネンベルク（九六一—九八四）によって聖別された。この教区は一二五八年までヴェルツブルクのノイミュンスター教区に所属していた。」⁴

と書かれており、ラインガーがコムブルク家の一員になっているが、その根拠は明らかにされていない。

教会の縁起に記されている事の真偽はさておき、『ローテンブルク都市史』の記述は、ホームページが右のような記載方法となる理由を明らかにしてくれる。すなわち、デトヴァング教区の設立については二〇一年までの記述にあるような文書が存在し、ローテンブルクⅡコムブルク家が断絶した際の遺贈に関しても、同様に歴史上の事実とするための資料があるが、教区の設立者として名の挙がっているラインガーが、コムブルク

家の一員であるという証拠が欠けており、ホームページの記述を歴史部分に限ろうとするならば、上のような表現とならざるを得ないということなのだろう。

シュヴェービシュ・ハルには塩分を含んだ泉があつて、有史以前から集落が存在し、おそらく問題となつている時代にも居住され続けていたと思われること、またこの集落がコッハー川の畔にあつて外敵からの防御力に乏しいこと、コムブルク家の砦がこの集落にほど近い丘の上にあること、他方デトヴァングの集落はさほど大きくないが、やはりタウバー川の畔にあつて、川伝いに侵入してくる外敵に対して脆いこと、タウバー川の曲流によつて天狗の鼻のように谷につきだしたいわゆる「酢入れの瓶」は、その防備のし易さから、それ以前にも利用された形跡があること等を考え合わせると、我々の持つべきイメージとしては、シュヴェービシュ・ハル周辺で勢力を獲得した一族がコムブルクの砦を建設してコムブルク伯爵家を名乗り、デトヴァングに教会を寄進してあらたに教区を作るとともに、近くの防衛に便な土地に新たな砦ローテンブルクを建設した、ということになるだろう。この一族は後の一〇七八年に、コムブルクの中にベネディクト派の修道院を創設している。この修道院は現在でも見ることが出来るが、延長五百メートル近いローテ

ンブルクと同様屋根があり行き来の出来る高い壁で囲まれた、非常に防備の堅い、修道院というよりもむしろ城砦に近い印象を与える建築物である。なおシュヴェービシュ・ハルの都市案内⁵⁾は、この修道院の寄進者をコムブルク＝ローテンブルク伯爵家としているがその根拠は明示されていない。

『ローテンブルク都市史』に従つて伝説部分を少し補つておくと、この「酢入れの瓶」には、ファラムントの塔と呼ばれる建築物があつたという。この塔は一八〇一年にバイエルン王国の官吏が、この塔の石材を道路舗装に使うことを思いつき、解体されてしまった。伝説によると、この塔はフランケン大公のファラムントが建造したものだといわれている。残っていれば、石材の特徴などから年代の推定も可能であつた筈で、残念なことだ。ローテンブルクの周辺はホーエンローエ平野と呼ばれる、緩やかな起伏はあるが全体的には平らな地形であり、その中を深く穿つて川が流れている。斜面は一般に急であり、直登をしようとする両手を使わなければ不可能ほどである。谷へ突き出した細長い土地に作られた砦は、谷に面した三方が六〇メートルほどの高さの急斜面となつているので、この側の防備はまず必要がなく、平らではあるものの東側だけに注意を集中することが出来る。このような地形は付近にはここにしかない

ので、コムブルク伯爵家以前にもこの地に根拠地を置いた者がいない方がむしろ想像しにくいことであろう。カール大帝が帝国をガウに分け、ガウグラーフ（伯）に治めさせたことはよく知られているが、こうした状況から、問題のラインガーないしリーヒアルトがフランケン大公であつて、この砦に宮廷を構えていたと考えるのも、あながち的外れではないかも知れない。少なくともヴェルツブルクの司教ハインリヒを兄弟に持つリーヒアルト・フォン・ローテンブルクという人物がいたことは確かであり、ローテンブルク伯は実体のない存在ではないと『ローテンブルク都市史』の著者はこの項を結んでいる。

ホーエンシュタウフェン

ホームページの記述に話を戻そう。

二〇一一年までと現在との二つの記述が大きく異なっているのが、後半のローテンブルク伯家の断絶後の相続の問題である。前者は『ローテンブルク都市史』の記述を簡略化した形で書かれているので、しばらく『都市史』に従うと、ローテンブルク＝コムブルク家の最後の伯ハインリヒ・フォン・ローテンブルクは、夫人ゲーバの同意を得て全ての財産をコムブルクの修道

院に遺贈する決定をした。その中にはローテンブルクも含まれていたという。しかしこのローテンブルクの遺贈は時の皇帝ハインリヒ五世に承認されなかったばかりでなく、皇帝は相続者として甥のシュヴァーベン大公コンラート・フォン・ホーエンシュタウフェンを指名したという。断絶した貴族の家系の遺産を収受することは国王のレガリアであるので、この決定は決して不思議ではない。だが、現在のホームページの記述では、前述のようにこのレガリアの行使は行われず、遺言の通りコムブルクの修道院と、ヴェルツブルクのノイミュンスタール教区に譲渡されたという。コムブルクもまた、デトヴァングと同様ヴェルツブルクの司教区に属するので、その一部がヴェルツブルクに行ったのは不思議ではないかも知れないが、この点については特に説明はされていない。

このように相続の結果が正反対であつたにもかかわらず、次の記述はあまり異なっていない。現在のホームページ、

「一二四二年に、ホーエンシュタウフェン家からの初めてのドイツ王であるコンラート三世は、後にローテンブルクの街となる土地を入手し、タウバー川の谷に張り出した尾根に「ローテ・ブルク」を建設させた。この砦は、一一

六七年に初めて「Castrum Imperiale」（帝国城砦）と表記されている。」

二〇一一年までのホームページ

「コンラート・フォン・ホーエンシュタウフェンはこの間に、コンラート三世（一一三八―五二）として神聖ローマ・ドイツ帝国の王位にあったが、ヴェルツブルクのノイミンスター教区から交換によってデトヴァングの上に張り出した尾根を入手し、その立地として具合の良い土地にシュタウフェン家の砦、ローテンブルクを建設した。彼はそこで時として宮廷を開き、管理者として代官を置いた。」

この二〇一一年まで表示されていた記述に従うと、コンラートは一度は相続で、もう一度は交換によって同じ土地を入手したことになる、この矛盾を解消するためには、コムブルク家の砦とホーエンシュタウフェン家の砦は別の場所になければならない。しかしローテンブルクの周辺には、これほどに大きく谷へ突き出した土地は一カ所しか存在しないのだ。

こうした齟齬はあるものの、現在ブルク庭園となっているタ

ウバー川へ突き出した尾根の部分がホーエンシュタウフェン家の所有となり、コンラート三世がそこに新たに砦を作らせたことについては異同がない。中世のドイツ王は、あちこちに分散している領地を移動しながら暮らすのが常であったから、コンラート三世が、エデッサへの十字軍に参加するなどしてドイツを留守にすることも多かったにせよ、ローテンブルクに滞在したことがないと考えの方がむしろ不自然だろう。ホームページの記述、またローテンブルクの起源を、それ以前の経緯を切り捨ててホーエンシュタウフェン家の砦とその周囲に形成された集落に置いている古ローテンブルク協会出版の『市壁 市門―塔、ローテンブルクの歴史についての証言』⁶⁾等は、その後のコンラート三世の動向についてほとんど語っていない。これに反し、手元にあるうちもっとも古い『ローテンブルク都市史』が、都市権の獲得の理由として次のように述べている。以下の記述は、他の資料から裏付けられる史実を用いての推定と考えられるが、出典は明記されていない。

「さて、コンラートは皇帝によってローテンブルクとフランクエン大公位に叙封されたが、その後皇帝ローターとホーエンシュタウフェン家との間に深刻な対立が生じた。

しかしついに受封が承認され、一一三七年には王となってローテンブルクに宮廷を開いた。彼は前面に砦を建設し、かつてのローテンブルク伯の砦は自身が任命した代官に管理させた。それらの代官の中、「ドイツ民族による神聖ローマ帝国司厨庁長官」のノルデンベルク家は後に特別な意味を持つようになった。

コンラートはビザンティン帝国の女帝イレネの姉妹であるゲルトルトと結婚し、一一四四年にはフリードリヒが生まれたが、母親は産褥で亡くなった。フリードリヒはローテンブルクで養育されたため、「ローテンブルクの子」と呼ばれた。

一一五二年に父親が死去したとき、フリードリヒは八歳であった。もしも必要な年齢に達していたらおそらくこの「ローテンブルクの子」の手に落ちたはずの王位は、従兄弟のフリードリヒ・バルバロッサが引き継いだ。しかしフランクンの所有地は「ローテンブルクの子」の手に残されていた。

フリードリヒはやがて騎士にふさわしい男に成長し、ローテンブルクで華麗な宮廷生活を繰り広げた。一一五七年に彼が一二歳になったときに、従兄弟のバルバロッサは

ヴュルツブルクの華やかな帝国議会の際に、彼に騎士の刀礼を施した。……彼は皇帝によって大公に叙任され、ローテンブルク大公を名乗った。またハインリヒ獅子公の娘ゲルトルトと結婚し、ともに華麗な宮廷生活を送った。

しかし宮廷での華やかな日々は長くは続かなかった。富裕公、あるいは美公と呼ばれるようになったフリードリヒは、従兄弟のバルバロッサとともに、教皇アレクサンデル三世を追放するためにイタリアへ向かった。激しい戦いの末、フリードリヒはサン・ピエトロ教会に突入した。防衛側はこの攻撃を支えきれず、ローテンブルク大公フリードリヒは自身の軍旗をサン・ピエトロの祭壇に掲げることに成功した。しかし勝利の後に続くのは死だった。

軍隊の中に、おそらくマラリアと思われる悪疫が蔓延し、これが若き騎士を打ち倒した。遺骸はドイツへ、下フランクンのエーブラッハへ運ばれ、母の傍らに埋葬された。一二九六年にこの墓は同地の修道院内へと改葬され、現在でも主祭壇の裏手に位置している。若い寡婦はデンマーク王ヴァルデマールの息クヌートと再婚し、フリードリヒの遺産は従兄弟のバルバロッサの手に渡った。

ローテンブルクの市庁舎の塔に四人の人物の像がある

が、このうちの一人が「ローテンブルクの子」フリードリヒだと言われている。

生前の従兄弟との親密な関係故に、またその遺産が自身の手に残ったという事実もあって、バルバロッサが従兄弟の死後もローテンブルクに強い関心を持ち続けたのは、納得の行かないことではない。一一七一年にバルバロッサはローテンブルクに来て、砦の周りに徐々に大きくなっていく集落に対して様々な特権を授与した。ローテンブルクは一一七二年に彼によって都市権を与えられたと仮定しても、おそらく誤りではないであろう。このことを示す文書は残っていないが、人々は何百年にもわたってそのように伝え続けてきた。たとえば一六七二年四月一九日には、市 (Stadt) 昇格五百年の記念式典が催されている。⁷

引用が長くなったが、この部分は歴史上の事実が後世の人々からどのように理解されるか、あるいはどのような説明を行えば納得が得られるかをよく表している。一〇世紀の気候の温暖化と農業革命の結果、穀物の播種量と収穫量との比率が大幅に改善され、単位面積あたりの食料供給量が増えて人口負担量が大きくなると、余剰となった人的資源は農業を離れて商業や手

工業に携わることになる。こうした人々、特に遠隔地貿易に従事する商人は交換などの利便性を求めて集落を作る。自己の支配領域内に出来た集落を周囲の地域から区別し、市場の開設権をはじめとする、本来国王に属するとされる様々の権利を分与することにより、支配者の側も、たとえば後のミュールドルフの戦いの際にローテンブルクが参戦したような支持、また場合によっては税金の徴収などの実質的な利益を得られる。後にミュンヘンを始めとしてリューベック、ブラウンシュヴァイクなどの都市を自ら作ったヴェルフ家のハインリヒ獅子公とまでは行かないにしても、ホーエンシュタウフェン家の諸王も、都市の創設には熱心だった筈である。しかし都市として認定されたことを「昇格」と考える都市住民の眼からすれば、もたらされた恩恵には相応の対価がなければ納得が行かず、何らかの特に感情に訴えたい理由を考え出さずには居ないものなのだろう。

ハインリヒ・プレティヒヤのドイツ史⁷⁾によると、フリードリヒ・バルバロッサがローテンブルクを訪れた記録はない。しかし都市権の授与は、伝令によって行うことも出来るのであるし、また授与を行った国王は必ずしもバルバロッサでなくとも良い。都市住民の側からすれば、授与者が高名であればそれに越

したことはなく、また納得の行く理由があつて欲しいと言うことになるわけだ。

ホーエンシュタウフェン家治下のローテンブルクについては、再び現在のホームページの記述に戻ることしよう。

「砦の建設とともに、一二世紀末には街並みも姿を現し、一二四一年には初めてラテン語の都市を意味する *Civitas* キヴィタスと表記された。この街は最初のリング状の防御壁を備え、市の立つ広場と教会、聖ヨハネとドイツの二つの騎士団、ドメニコ派の尼僧修道院とフランススコ派の修道院があつた。

ホーエンシュタウフェン家の街は、当初王の官僚の支配のもとにあつた。市民による自治は、多数の王の特権によって支えられた市参事会制度の形で、富裕な上層部によって段階的に形成されていった。

この発展の頂点は、一二七四年の国王ルードルフによる自由特権である。一四世紀の末に至るまでにローテンブル

クは、皇帝と帝国のみをその支配機関とする、事実上ほとんど自治都市となつていたのである。」

ローテンブルクは、このようにしてローテンブルク＝コムブルク伯爵家の砦の前の小集落からホーエンシュタウフェン家の持ち物となり、ほぼ三百年を経た後に自由帝国都市として出発することとなった。しかしこの時点では中世都市として必須の施設である、周囲を囲む市壁、市庁舎、さらに主要な宗教施設としての聖ヤコブ教会のいずれもが未完成で、現在残されている形態を獲得するまでには、さらに三百年ほどの期間が必要であつた。この間の経緯については、稿を改めて述べることしたい。

注

- (1) Kurt Holstein: Rothenburger Stadtgeschichte Verlag J.P.Peter Rothenburg ob der Tauber 4. Auflage
- (2) Der grosse Volkswagen und Audi Atlas 96/97 RV Verlag への道路地図は現在廃刊となつてゐる
- (3) http://www.tourismus.rothenburg.de/sehenswert/kurze_stadt_geschichte/ 2014/10/03
- (4) Im Jahre 968 wurde die von Ritter Reinger von Comburg gestiftete

Kirche durch den Würzburger Bischof Boppo von Hennenberg (961-984) geweiht. Bis zum Jahre 1258 blieb die Pfarrei im Besitz des Würzburger Neuminsterstifts. Dann wurde sie vom Deutschen Orden bis zur Einführung der Reformation (endgültig 1556) verwaltet.

- (5) Eva Maria Kraiss: Schwäbisch Hall — Ein Stadtführer. Swiridoff Verlag 2002

- (6) Karl Borchardt u.a.: Mauern – Tore – Türme Zeugnisse zur Geschichte von Rothenburg ob der Tauber. Verein Alt-Rothenburg e. V. 2005

- (7) Heinrich Pleichla hrsg.: Deutsche Geschichte Bd.3 1152-1254 S.51 Bertelsmann LEXIKOTHEK Verlag 1984